

資料Ⅱ－９

とどまるのに対し、どんぐり会では、避難した者のいる世帯が、高知市よりもやや高く 4 割程度を占める。

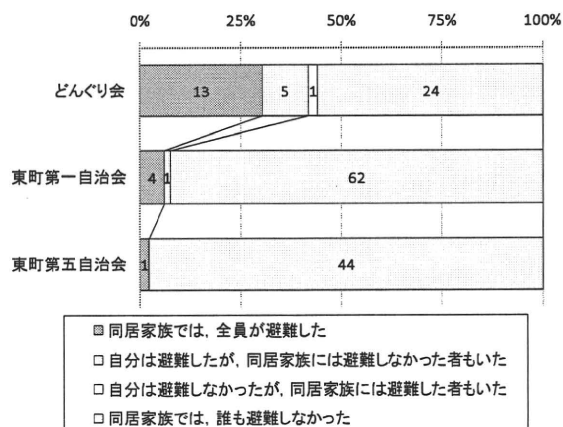


図 自宅からの避難の有無

また、避難の支援行動の実施したかどうか、および、支援行動を受けたかどうか、を尋ねた結果をみると、高知市と比べて票数が少ないものの、ほぼ同様の割合となっている。浦河内部での地域差をみると、どんぐり会の回答者では、支援活動を受けた者の、割合が高い。

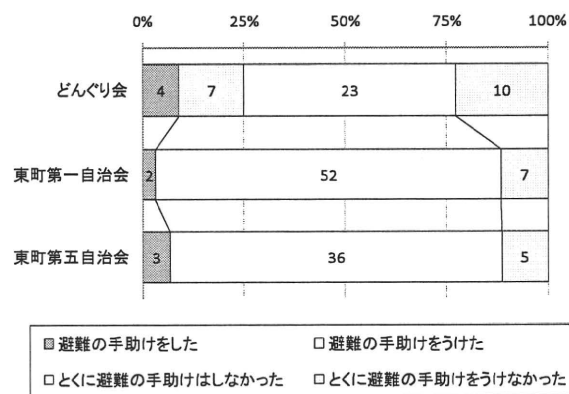


図 避難の支援活動および受援の有無

次に、2010年のチリ地震による津波の前に、地域の防災の催しへの参加の有無を尋ねた結果を見ると、東町第一・第五自治会では 3 割程度、

どんぐり会では 8 割弱であった。東町第一・第五自治会は、高知市の種崎地区の割合に、どんぐり会は浦河地区の割合におおむね該当する。

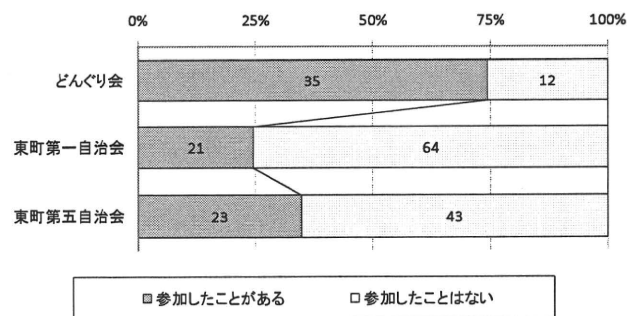


図 防災の催しへの参加の有無

E. 結論

高知市、および、浦河町ともに、事前の防災訓練等に参加している者の割合の高い地区ほど、災害時の援助行動および受援行動も、実際に高くなる傾向が見られた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）
分担研究報告書

実証フィールドにおける防災啓発活動の効果と今後に向けた提案
－浦河べてるの家のメンバーによる 2011 年 3 月 11 日東日本大震災発生時対応の検証－

研究分担者 清水里香 社会福祉法人浦河べてるの家 生活指導員
八巻知香子 国立がん研究センターがん対策情報センター 研究員
河村宏 特定非営利活動法人支援技術開発機構 副理事長
研究協力者 秋山里子、池松麻穂、伊藤知之、今堀彩、川端俊、坂井晃、辻ひとみ
本田幹夫、本間恵子、向谷地悦子、吉田めぐみ、和田真
(以上、浦河べてるの家メンバーおよびスタッフ)

3月11日の東日本大震災では浦河町にも大津波警報が発令され、実際に2.7メートルの津波が被害をもたらした。この津波の襲来に対して、べてるの家のメンバーがどのような避難行動をとったのか、また、さらに改善するにはどのような知恵があるのかについて振り返る「当事者研究」ミーティングを行った。

全員がこれまでの繰り返し行った避難訓練の成果を活かして、津波の第一波襲来前に適切な避難行動をとることができた。避難後、体調を崩し入院した人、緊張の中では普段以上に活動できた人がいたが、避難先で適切な行動をとることができた人であっても、感じた不安やストレスは大きく、それを緩和するための方策が検討された。

この「当事者研究」の参加者からは、練習の成果を活かして適切に避難ができたことを高く評価すること、苦労を分かち合うなど日頃からべてるの家のメンバーが大切にしていることが災害時にも有用であること、またそのスキルが有用であるからこそ避難先でも語り合う場を設定することが同意された。

A. 研究目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、従来の想定をはるかに超える巨大な津波とそれに伴う甚大な被害をもたらした。本研究をともに進めている北海道浦河郡浦河町でも2.7メートルの津波が観測され、人的被害は免れたものの、港付近では大きな経済的被害を出した。精神障害者の当事者グループであるべてるの家のメンバーは、繰り返し津波を想定した避難訓練を実施してきたが、この津波襲来時にはその訓練がどのように活かされたのだろうか。また、さらに残された

課題はどのようなもので、どうすれば解決・軽減が可能なのだろうか。本報告では、べてるの家のメンバーが経験した発災時の対応と課題について整理することを目的とする。

B. 研究方法

べてるの家のメンバーおよびスタッフ計13人による「当事者研究」ミーティングを行った。当事者研究とは、べてるの家で長年培われてきた当事者による支援方法で、自分たちの経験を皆で語り合い、課題を明らかにし、また解決に向けた方

法を編み出すための議論を行うプロセスである。
(倫理面への配慮)

分担研究者の所属施設でもある浦河べてるの家のメンバーの参加については、障害当事者の同意のもと、研究協力者として研究を実施する主体として参加している。参加者は、被調査対象者ではなく、互いに事業の主体者として行う共同研究として実施している。

C. 結果

1. 避難行動

この振り返りに参加したメンバーは、地震発生時に6カ所で地震を体験した。すなわち、べてるの家の日中活動場所である「ニューべてる」「セミナーハウス」「カフェぶらぶら」、共同住居である「しおさい荘」、「レインボー・ひだまり」、地域の医療機関である日赤病院の「デイケア」であったが、その全ての場所からすべてのメンバーが短時間で津波の第一波襲来前に高台への避難を完了していた。地震発生時に上記の場所にスタッフが居合わせない場合もあったが、避難は問題なく完了し、それぞれの避難先でスタッフと連絡を取り合うことができていた。

いずれの場所でも繰り返し避難訓練をしており、どこに避難するか、どの経路で避難するかについて迷った人はおらず、声をかけた人の呼びかけに応じて全員が避難行動に移っていた。

一時避難先が屋外であった場所では、長時間の避難は困難であろうというスタッフの判断で、携帯電話でテレビを見ながら、第一波到来までに10分以上あるという情報を元に車で屋内の別の避難場所に移動した。この移動は海拔の低い場所にある国道を通過して移動する必要がある、その判断に立ち会ったスタッフは「迷いもあったが、まだ少なくとも10分あるということで移動を決めた」と話した。

2. 避難後に体調を崩し入院が必要となった人

べてるの家のメンバーの中で3人が今回の震災を契機に体調を崩し、入院が必要となった。

薬を持たずに避難し眠れない状況が続き、翌朝12日に薬を処方してもらった後も「固まる」状態が続いたメンバーは、入院が必要な状態となり、スタッフと主治医との連絡により緊急入院することになった。今後「自分をより上手に助ける」ための方法として、同様の状況が生じた際には、薬がないことを早めに伝え処方してもらい、辛い場合にはもっと早い段階で入院したいと伝えることで、より深刻な事態を避けることができるのではないだろうかという知恵が出された。

地震発生前から体調が悪い状態となっていたメンバーは、地震の揺れと妄想の感覚が一体となり、避難所から自宅に戻った後も「余震で建物が壊れたらどうしよう」という不安で自宅に留まることができず、深夜から共同住居と外を行ったり来たりしながら、スタッフが訪れ、入院するまでの数時間を過ごした。今回の当事者研究の中で、妄想や不安について避難先でも伝えることができていればつらさはかなり軽減されたのではないかと話し合われた。

避難先から帰宅した後に具合が悪くなった一人暮らしのメンバーのケースについても話し合われた。本人はこの当事者研究の時点でも入院中であったため参加しなかったが、当日の様子から、避難所で解散となり、一人きりになった時の不安が極めて大きかったこと、迷惑をかけないように、しっかりしなければ、という意識が状態の悪化を招いたのではないかと推察された。他のメンバーからも、避難先より、一人になったときの方が余計に不安だったとの意見が多数出され、不安が強いときには共同住居で一泊させてもらうなど、孤立しない方法を考えることが重要だろうと話し合われた。

3. いつも以上に適切な行動がとれた人

不安などから体調が悪化した人も多い一方で、適切な行動がとれたと語った人もいる。いつもは自分の意見を口に出すことに困難を感じているという二人のメンバーは、「普段、人としゃべる

のが苦手なんだけれど、そんなこと言っている場合じゃなくて。叫んでも、暴言はいてもいいから、自分の身を守るためには、何か言葉を発さなければという感じだった」「普段だったらあまり人にははっきり意見言ったりできないし、オロオロするんだけど、とにかく断られても、嫌われてもいいから、引きこもって自宅にいる〇〇ちゃんに逃げてほしくて、とにかく逃げてくれて、しつこく言って逃げてもらった」と答え、いつもはできないことがきちんとできたと語った。

また、車いすを押して避難することを頼まれたというメンバーは、「今回はね、地震が始まって、『さあ逃げるよ、車いすを押してね』って言われたとき、自分の病気を忘れちゃいました。普段だったら踏切なんか、ドドンと行っちゃうところを、バックで押して落ちないように、って、そういう気遣いもできたから。わりと普段よりは冷静だったのかな。いつもだったら、ああもうだめだ、ってなっていたと思うんだけど。」と普段以上の冷静な行動ができたと言った。

４．「自分を助ける」ために役だったこと「さらに良くする点」

避難するにあたって、「誰かが声をかけてくれたこと」を挙げた人は多かった。誰が声をかけたのか分からないというケースもあったが、「逃げようって言い合ってみんなで逃げた」「逃げようって声をかけてくれなかったら避難しなかったかもしれない」という発言はほとんどの人に見られ、声をかけあって逃げることの大切さが一致して語られた。

自分が落ち着くための方法を編み出している人はこの災害時にも役立っていた。サロンパスを貼ることで歩きやすくなる等の具体的な対処法は災害時にも有効であった。

３で示したように、非常事態の緊張感の中では適切な行動がとれた人も、避難所でもとても疲れた、避難先よりも自宅に戻って一人になって不安だった、とつらさを感じており、そのつらさを共有

する場があればもう少しつらさが和らいだのではないかという意見が様々な角度から検討された。まず、避難先に着いた後、「薬を持ってくるのを忘れた」「こんな幻聴が聞こえている」「自分は10段階のうちどれぐらいのつらさの状況にある」などを語り合う場を設定することが挙げられた。このような場の効果としては、医療機関に薬をもらいにいく、必要な場合には早く入院するなどの具体的な対応を引き出すとともに、他の人と話すことによる幻聴などの苦痛や不安の緩和につながるということが経験的に明らかである。また、避難先で早い時期にこれらの状態を共有することで、避難先から共同住居や各自宅に戻ってからも互いの状況を知り、支え合うことに役立つことが指摘された。

別の角度からの知恵としては、体も心もこわばる避難先において、その緊張をほぐすための活動を取り入れることを今後検討していくこととなった。

D. 考察

今回の「当事者研究」の参加者からは、練習の成果を活かして適切に避難ができたことを高く評価すること、苦労を分かち合うなど日頃からべてるの家のメンバーが大切にしていることが災害時にも有用であること、またそのスキルが有用であるからこそ避難先でも語り合う場を設定することが同意された。

避難先の経験として、テレビから流れてくる甚大な被害の様子からあおられる不安や、被害への心配はべてるの家のメンバー、すなわち精神障害のある当事者だけでなく、健康な一般町民にも感じられていたことが挙げられた。これまでべてるの家のメンバーは、不安が強いからこそ町民に先かけて避難場所を確認し、避難訓練を実施してきた。避難先での生活についてもべてるの家のメンバーが町民に先駆けて解決や緩和の手法を開発することは、一般町民が抱える不安の緩和にも有効に働くことが予測された。

E. 結論

全員がこれまでの繰り返し行った避難訓練の成果を活かして、津波の第一波襲来前に適切な避難行動をとることができた。避難後、体調を崩し入院した人、緊張の中では普段以上に活動できた人がいたが、避難先で適切な行動をとることができた人であっても、感じた不安やストレスは大きく、それを緩和するための方策が検討された。

今回の「当事者研究」の参加者からは、練習の成果を活かして適切に避難ができたことを高く評価すること、苦労を分かち合うなど日頃からべてるの家のメンバーが大切にしていることが災害時にも有用であること、またそのスキルが有用であるからこそ避難先でも語り合う場を設定することが同意された。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

八巻知香子, 望月美栄子. (2011) 災害時要援護者対策におけるユニバーサルデザインと合理的配慮ーハワイ州の *Interagency Action Plan* の概要と実践からー. *社会福祉学*. 51(4), 174-186.

2. 河村宏, 清水里香, 米山豊, 田中知恵子, 伊藤英助, 後藤雅博, 浅野宏嗣. 障害者と防災ー地域のつながりを再生する機会としてー. *日本精神障害者リハビリテーション学会 第18回 浦河大会*. 2010.10.22-24. 北海道浦河郡浦河町.

浦河べてるの家. べてるの防災の取り組みについて. *浦河町地域防災フォーラム～浦河における今後の総合的な防災～*. 2011.2.28. 北海道浦河郡浦河町.

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）
分担研究報告書

「災害と民族共生をめぐる人類学的研究：北海道日高地域の
「アイヌ」／「和人」関係から」

研究分担者：関口由彦 特定非営利活動法人 支援技術開発機構 研究員

災害時に重要となる他者の生に配慮した関係性は、民族の境界を越える「トランスエスニック」なつながりとして、いかに形成され得るのだろうか。他者への実感的理解が民族の境界を越えて積み重ねられていくプロセスをライフストーリーの聞き取りとその丹念な分析から人類学的に考察し、「互助」を旨とする人間同士の結びつきを生み出す土壌を理解することが、研究目的である。その際、生活世界の人類学的探究の蓄積を利用すべきであることを主張する。

具体的には、北海道日高地域の様似においてアイヌ民族の文化伝承・権利回復の運動に関わる人々間の関係性の構築について記述する。そこにおいては、①「運動の理念」よりも「生活」を重視する強い傾向、②日常的な馴染みの関係性という基礎、③それらを基盤とした定型的アイデンティティの選択という特徴が見出された。生活世界においても、「アイヌ」／「和人」という明確な境界線にもとづく定型的な区別は自己（他者）認識の道具として力強く機能しているように見えるが、そこにはカテゴリーの創造と再編による境界の移動が存在していた。このように形成された人間同士の結びつきは、自己／他者を一元的カテゴリーにおいて表象することとは無縁であり、それゆえにこのような関係構築のプロセスを理解することは、災害時の「エリートパニック」[ソルニット 2010]を避けることにつながるのである。

A. 研究目的

昨年度の筆者の研究目的は、「災害時に重要となる他者の生に配慮した関係性は、民族の境界を越える「トランスエスニック」なつながりとして、いかに形成され得るのだろうか。災害時に求められる関係性は、平時の日常生活におけるどのような関係性の延長ないし積み重ねとして形成されるのであろうか」、という課題に取り組むことであった。そこから、日常生活を共にすることによる他者の「生」そのものへの実感的理解の積み重ねが、トランスエスニックなつながりを保障し、それこそが災害時に「被災者の固有な『生』」に

配慮する関係性を生み出すということを構想した。このような構想に基づいて、本年度の研究目的は、他者への実感的理解が民族の境界を越えて積み重ねられていくプロセスを、ライフストーリーの聞き取りとその丹念な分析から人類学的に考察することである。そのために、ライフストーリーの語りの中で用いられる自己／他者を認識するためのカテゴリーの使用に注目する。そのようなカテゴリーの使用によって開かれる人間同士の結びつきを、レベッカ・ソルニットの言う「災害ユートピア」をもたらす日常的基盤として捉えることができるのではないだろうか。そうだとす

れば、本研究が描き出すトランスエスニックな結びつきを理解することは、ソルニットが警鐘を鳴らす為政者側のエリートたちが災害時に引き起こすパニック（「エリート・パニック」）を回避するために求められるはずである。ソルニットによれば、エリート・パニックは人種差別の感情を喚起するものでもあるため、本研究の対象地域の災害時に効力を発揮するトランスエスニックな結びつきを構想することは極めて重要であるといえよう。

本節の以下では、ソルニットが『災害ユートピア』において提唱しているものを確認しておこう。レベッカ・ソルニットは、災害時に「エリートパニック」が生じる危険性に最大限の警鐘を鳴らす。しかし、その一方で、「災害ユートピア」と呼ぶべき共同体が立ち上がることも主張している。「エリートパニック」か「災害ユートピア」か、その命運を分ける鍵は、災害が起こる以前の、わたしたちの日常の中の人間同士の結びつきに見出されるだろう。

「エリートパニック」とは何か。ソルニットは、さまざまな災害の事例の検討から、「災害時にしばしば粗野な行動に出る、権力の座にある少数派の行動」に警告を発している〔ソルニット 2010: 20〕。ソルニットによれば、災害時の市民による自発的な互助活動が、権力者の目には「制圧すべき暴徒や、まとめなければならぬ群集」に映り、救助すべき被災者たちが既成の社会秩序を破壊する犯罪者として鎮圧や隔離の対象とされてしまう。2005年8月末にアメリカ合衆国南東部を襲った大型ハリケーン「カトリーナ」のあとのエリートパニックは異常なレベルに達していたという。「カトリーナの被害者たちは危険な極悪人だと見なされ、災害への対応は救出から悪人のコントロールへ、さらにそれ以下へとシフトしていった。カトリーナは災害の連続だった。それは嵐という自然災害に始まり、セント・バーナード郡とニューオーリンズ郡の大部分を水没させた堤防決壊という明白な非自然災害へ移行し、次に避難先と支援に対する政府の度重なる失策や拒絶が生んだ社会的破壊へ、そして、地域の、次に州の、ついには連邦当局が被害者を罪人に決めつけ、ニ

ューオーリンズを監獄の町に変え、多くの人々に銃を突きつけ、避難を許さず、殺したり、死ぬよう放っておいたりした、言語道断の大惨事へと移っていった」〔ソルニット 2010: 323-324〕。「カトリーナが襲った週の大部分をニューオーリンズですごした数万人の取り残された人々にとって、トラウマとなったのは単に大嵐や洪水の凄まじさだけではなく、死体が浮かび毒蛇が泳ぐ水、多くの人々を死に至らしめた、肌にも水ぶくれができるほどの高温、汚い水に囲まれた高速道路の陸橋で人々が出産し死んでいった黙示録的な日々、水浸しの不潔な廃墟と化した町では多くの人々が救出されることを完全にあきらめていた。せめて子供だけでも避難させようと我が子を手放した人もいた。ニューオーリンズ市民は同胞の人間から、政府から、見捨てられていた。だが、それ以上に残酷なのは、彼らが最も弱って傷つきやすくなっているときに、動物や敵として扱われたことだった」〔ソルニット 2010: 340-341〕。

そして、災害の被害者を「動物」や「敵」として捉えるエリートパニックは、人々の間に伏流する人種差別の感情を喚起する。「パニックを起こしたエリートのように、人種差別主義者たちもまた、自分たちがいなければ、収拾のつかない野蛮な世の中になるだろうから、自分たちの行う殺人的行為は秩序の維持と文明の保護のために必要なのだと、頭の中でくり返す。クー・クラックス・クランの殺戮や、かつて南部であったリンチパーティは、しばしば黒人の犯す犯罪についての作り話により引き起こされ、煽られていた。むろん、カトリーナの間には黒人がまったく罪を犯さなかったわけではないが、黒人は誰でも犯罪者だと信じ、黒人全体や罪のない個人まで罰することは、人種差別主義の最も尊大で常軌を逸した自警行為である。恐怖と噂の暴風と、昔の作り話の洪水に掻き立てられたエネルギーはきわめて危険なものに転じた。そして、例によって災害は聞き慣れた言葉で理解され、実際に何が起きたかはほとんど注目されずに終わった」〔ソルニット 2010: 361〕。

災害の被害者を既成の秩序の破壊者として恐れるエリートパニックは、なぜ引き起こされるの

だろうか。ソルニットによれば、「エリートパニックはすべての人間を自分自身と同じであると見る権力者たちのパニックである」。つまり、競争を基盤にした社会では、最も「利己的」な人間が一番高い地位に登りつめるのであり、お互いを自らと同じ「利己的」な人間として見なすことが、エリートパニックの要因であるとされる。だとすれば、災害時には、次に述べるような「災害ユートピア」ともいうべき状況が現出することを理解することは、エリートパニックの克服において肝要である。

ソルニットはさまざまな災害の事例の検討から、災害の中では、人と人との間に利他的な互助の関係性が生じると主張する。それは、エリートパニックの要因となる利己的な人間像を覆すものである。「地震、爆撃、大嵐などの直後には緊迫した状況の中で誰もが利他的になり、自身や身内のみならず隣人や見も知らぬ人々に対してさえ、まず思いやりを示す。大惨事に直面すると、人間は利己的になり、パニックに陥り、退行現象が起きて野蛮になるという一般的なイメージがあるが、それは真実とは程遠い」〔ソルニット 2010: 10-11〕。「それは、危機に底力を発揮するパラダイスである。それは、自らの可能性をまったく開花させることなく縮こまり、憂鬱な社会に甘んじているわたしたちの普段の姿とのコントラストにより指し示される。多くの人々は今ではよりよい社会など望んですらいないが、とはいえ、それに出会えば、はっきりと認知し、その発見は彼らの体験の無名性を通して光り輝く。中にはそれを認めるなり、しっかりつかみ、利用する人たちもいる。そして、良くも悪くも、長期的な社会的政治的変革が瓦礫の中から生じる。今の時代、パラダイスがあるとすれば、そこへの扉は地獄の中にある」〔22〕。そして、「そこでは、見知らぬ人同士が友達になり、力を合わせ、惜しげなく物を分け合い、自分に求められる新しい役割を見出す」〔ソルニット 2010: 32〕という。このような「災害ユートピア」においては、人々の間に存在したさまざまな「壁」が取り払われる。「いつもの体制や格差が重要性を失い、存在しなくなったとき、人々の間に絆がうまれる」〔ソルニット

2010: 229〕。

ただし、「互助」を旨とする「災害ユートピア」は、やがて「慈善」に基づく「災害管理」に取って代わられていくことがある。「あらゆるものがひっくり返り、貨幣がほとんど意味をもたなくなった地震直後には、市民は間に合わせのもので急場をしのぎ、多くのものを無料で分け与えあったが、やがてそれらは、効率的ではあっても喜びはめったに得られない組織的な災害管理に場を譲ることになった。市民による気軽な無料キッチン は、多くがチケットの提示を要求するスープキッチンに取って代わられた。…市民が自分たちで食事を用意することと、チケットや役人を巻き込むシステムによる配給を受けることの違いは、独立と依存の違いであり、互助と慈善の違いである。与える者と求める者は二つの異なるグループとなり、受け取る権利があることをまず証明しると要求する者から食べ物を与えられることには、喜びも団結も生まれない」〔ソルニット 2010: 75-76〕。ここでは、「互助」が「慈善」に転換されたとされる。

それは一体どういうことだろうか。初期の援助はたいてい直接の双方向的な相互扶助であった。つまり、自身も被災した人々が、助けを求める他の人に手を差し伸べたのであり、その場にいる全員が与える側と受け取る側の両方であるということが人々を団結させたというのである。この「互助」を旨とする人間同士の結びつきは、「与える者」と「求める者」を分けることなく、他者の固有の受苦そのものに寄り添うことのできる関係性であろう。それに対して、公共機関による「慈善」活動は、片側通行になりやすく、上から下に手を差し伸べることで「与える者」と「求める者」の「壁」を強調してしまう。それは、物質的な援助をしながら相手の主体性を奪ってしまう暴力的な「支配」に横滑りしてしまいがちである。ソルニットによれば、相互扶助の共同性が生み出された場所においては、「支援のリーダーシップに部外者が割り込んできたことに対する怒り」が見られるという。「住民は見も知らぬ人たちに助けってもらったり、他人に支配されたりするより、自分たち同士で助け合うほうを好んだ」〔ソ

ルニット 2010: 124]。

「与える者」／「求める者」の関係において、他者を「求める者」として固定する理解は、一元的なもの（オリエンタリズム）にすぎない。しかしながら、他者の固有の受苦をわが身のこととして十全に理解できるとするもの、オリエンタリズム的な幻想といわざるを得ない。「互助」を旨とする人間同士の結びつきは、あくまで他者の理解しがたさに面と向かいながら、その受苦に間近から寄り添う関係性であろう。それは、「与える者」／「求める者」といった枠組みに左右されることなく、お互いの受苦の経験そのものを起点として、その都度の状況にふさわしい関係性を共に織り上げていく関係性といえる。この人間同士の結びつきを理解することは、エリートパニックを克服するための鍵となる。本稿の「考察」で展開されるのは、この結びつき（特に、トランスエスニックな結びつき）を形成していくプロセスの詳細な分析である。

最後に、ソルニットが求めているものを確認しておこう。それは、言うまでもなく、エリートパニックを回避し、災害ユートピアをもたらす土壌を涵養することである。ソルニットは、次のように述べる。「災害はわたしたちに別の社会を垣間見させてくれるかもしれない。だが、問題は災害の前や過ぎ去ったあとに、それを利用できるかどうか、そういった欲求と可能性を平常時に認識し、実現できるかどうかだ」[ソルニット 2010: 431]。つまり、災害時ではない普段の日常において、「別の社会」の可能性を平常時に認識し、実現することが、ソルニットの希望なのである。「災害ユートピア」をもたらす可能性のある土壌を普段から涵養しておくべきことこそ、過去のさまざまな災害に学ぶべき教訓であった。「エリートは、現代の災害学者が確認したように、災害時にはパニックを起こすが、それは解き放たれた人間は野蛮で危険だという思い込みから来ているのだ。そう信じる人たちは、彼ら自身、自分の身や利益を守るためには凶暴な行動を取るに違いない。だが、パニックに陥るエリートは危機的状況においては少数派であり、それを知ることによって、エリートの思い込みを宣伝するマスコミもろとも、文字

どおり、または心理的にも、彼らの影響を縮小し、彼らの武器すら取り上げることができるかもしれない。これは、災害の中にきらりと光る束の間のユートピアのような世界を作る突破口になるだろう」[ソルニット 2010: 434]。本研究は、その「土壌」としての人間同士の結びつきを深く描き出すことを目的とする。

B. 研究方法

トランスエスニックな結びつきの形成プロセスを探るために、2011年2月27日～3月12日のあいだに浦河・様似町在住のアイヌの人たち及び和人たちによるこれまでの生活経験の語り（すなわち、ライフストーリー＝人生の物語）の聞き取り調査を行なった。また、彼らの活動現場（アイヌ文化の伝承活動の場）での参与観察は、彼らの語りを検討するための視座を定めることに貢献した。

C. 研究成果

研究成果として、北海道日高地域におけるアイヌ民族の運動に関わる5人のライフストーリーを掲載する（※「付録」参照）。特に、アイヌ民族の運動に深く関わる和人の側からの語りは、「アイヌ」／「和人」の境界を再編するトランスエスニックな結びつきを考察する上で重要な示唆を提示している。なお、掲載されたライフストーリーに関しては、当人による文字原稿の確認・修正を経て、掲載の許可を頂いている。

D. 考察

本節では、日常において人々が他者と共に生きるための技法に着目したい。一元的理解からはみ出すものに目を向け、「壁」（「与える者」／「求める者」といった定型的カテゴリーの境界）を越える人間同士の結びつきを具体的に記述するには何が必要であろうか。記述のための道具を揃えたい。そこで、日常生活の実相から人間同士の結びつきに着目する本論文は、生活世界の人類学的探究の蓄積を利用すべきであることを主張する。

そこで、「生活の便宜」という観点から生活世界の人間像を問い直そうとしている松田の研究〔松田 1985、1986、1989a、1989b、1990、2009〕から多くの知見を引き出したい。日常生活の現場において人びとは何をしているのかということについての深い知見が、ここに見出されるからである。

松田は、人びとの言説や実践の背後にそれらを必然的に発露させる体系的な意味のシステムを前提することなく、生活の「便宜」に基づいて個々の言説や実践を生み出す生活知による技法に注目する。つまり、人びとの言説や実践の背後に、それを生み出す「文化」や「民族」といったカテゴリーを必然的なものとして想定する本質主義を退けるということであり、そのうえで人びとの「便宜」的な言説や実践を生み出す「生活知」に注目しようとしているのである。それはまた、人びとの背後に一元的な定型的カテゴリー——「被差別少数者」／「差別多数者」、「アイヌ民族」／「和人」——を見出すことを前提としないということでもあろう。

しかし、そのことは、人びとをばらばらな個人というアトムに解体しようとしているわけではない。現実には、人びとは日常の中で、「和人」／「アイヌ」といった定型のカテゴリーを用いて、自らの所属集団を想定しており、「個」の細分化に陥ってはいない。しかし、松田によれば、それが生活知に基づく便宜的な技法によるものであるということになる。あくまで、それらのカテゴリーは、生活の便宜のために、理解しがたい他者と共にあることに暫定的に同意することを約束するものなのであり、それらを人びとの一定の言説や実践を必然的に生み出す根源として固定化してはならない。人びとが用いているのは、生活の「便宜」に応じて対象を暫定的に固定化（同一化）したうえで、定型的な認識カテゴリーを一貫した意味のシステムから切り離して、相互に融合することのない複数のカテゴリーのストックとして配列し、それらを適宜使い分ける技法である。このような視座をとることで、運動の理念・役割・利害・アイデンティティにとらわれることのない生活者の複雑な生活実践（および他者性の

あり方）と、その実践が示す他者との連帯のあり方——無傷の直接的な相互理解ではなく、暫定的な同意としての連帯——、そしてそこに向き合う対話の道筋が見えてくることだろう。

以下では、「生活の便宜」という観点に基づいて、北海道日高地域というローカリティからアイヌ民族をめぐる日常的な「共生」／「連帯」の問題を描いていく。そこで、主な対象とするのは、社団法人北海道アイヌ協会様似支部並びに様似民族文化保存会の活動に携わるアイヌと和人の人びとである。

まず、アイヌの人びとにとって文化伝承・権利回復活動に関わるということがどのような意味をもつ出来事であるかということ論じていこう。その活動にいかに参加し、そこでどのような関係性が築かれ、その活動の中でどのようなアイデンティティをもつかということを検討することで、和人の人びとの「連帯」の土台となるものが明らかになるだろう。

活動に参加する動機を単純に「運動の理念」に求めることはできない。彼らにとって「生活」の問題は非常に大きく、各種助成制度を受けることを参加の動機として語る人びとは少なくない。現在、支部活動の中核を担うある人物は、次のように語っている。

対策事業の利用っていうのも頭の中にあっただからね。で、今のようにね、昆布取って、干し場に運ぶたって、今みたいな四駆とか軽トラなんてほとんどなかったからね。その頃、昆布運搬機っていうのが導入されたんだわ、私が理事になってすぐのあたりに。うちでも補助をうけて利用させてもらってたから、そういう制度の活用も、すごく大きく影響してると思う。

このような助成制度を受けることに対しては、活動に参加する人びとの中でも、それを「甘え」として批判し、「一人の人間として、きちっとした責任を持った行動をとっていけば良い」という意見も存在する。ただし、ここで指摘しておきたいことは、厳しい経済状況の中で活動に参加する

人びとの間には、「運動の理念」よりも「生活」を重視する強い傾向があるということである。上記の批判も、「運動の理念」に照らし合わせた批判というよりも、「甘え」という「生活」の姿勢をめぐる批判であると考えられる。そこでは、「生活」に資するものが尊重されているのであり、アイヌ語をめぐる、アイヌ語教室にも参加している人物が以下のように語るのも同様の感覚であろう。

私は、まずは社会に通用するのはアイヌ語じゃないよって言いたい。英語とかね、中国語の方を自分の子供に教育したい。ただ、それは、自分の興味とか、そういう分野で大学行って勉強することはすごく良いと思うんです。自分が興味をもって一生懸命することは良いんです。

活動に参加する人びとのあいだには、次の語りのように、お互いの困難な「生活」状況への配慮が見られる。

やっぱりさ、人間、生活が大変だったらさ、こんな文化だの、刺繍だのって、やろうって気持ちになれないでしょ。私も生活が大変だから自分も働いて、働きながらなんとかやってきたけど。

活動の中で「理念」よりも「生活」を重視することは、逆に「気負い」というものを取り除き、「自然な楽しみ」を生み出している。

やってたら楽しいって思えたし。だから、なんて言うかな、私って、「これは私がやっていかなきゃいけない」とか、気負ったというか、そういうのは全然なくて、もう自然にはじめて、自然に楽しんでやってたっていう感じ。

このようなお互いの「生活」を第一に考える活動を「楽しみ」ながら続けていくことで、当事者たちの意識が変化していくことがある。上述のよ

うな活動への参加動機を語っていた人物は、活動を通して徐々に「アイヌ民族」をめぐる問題について考えるようになっていったという。

いろんな人と知り合うきっかけも多くなり、知り合った人から考え方や、そして組織のあり方も勉強させてもらって、そうしていく段階で、やっぱり自分たちアイヌ民族はけっして差別されたり、蔑まれたりするようなものじゃないということに気づいていったと思うんだ。であれば、やっぱりきちっとした目線で見てもらって、シャモの方々からね。

もともと、「アイヌ」であることを否定的に考えていたという人は多い。「アイヌとして生きるよりも、ごく一般の日本人として暮らす方が子供の幸せにつながる」という両親の考えのもとに育てられる。あるいは、和人にアイヌが「いじめ」られているのをよく見ていたり、そのせいで、アイヌの身体的特徴とされる「毛深い」ということが嫌になったりする。さらには、「アイヌ同士の結婚」を避けるようになる。

結婚する時にやっぱり、まだ、今みたいな気持ちじゃないからね、自分の子供が体毛が濃いか、アイヌの特徴が強くなることは望まなかったから、結婚はアイヌの女性とはしないっていう気持ちが自然に出てきたね。これは、ほとんどのアイヌの人がそうだと思うよ。アイヌ同士の結婚なんてほとんどないからね。だから、家内も和人なんだ。

「アイヌ」というアイデンティティを否定的に捉えていた人びとが、「生活」のために活動に参加するようになり、やがてアイデンティティ意識を肯定的なものへと変化させていく。このような活動への参加の契機としては、日常的な関係性の存在が語られた。たとえば、かつて様似支部で生活相談員をしていた N 氏に誘われて参加した人びとがいる。この N 相談員の存在が大きかったと語る人は多い。そのほかにも、「母親」や「姉」といった家族の影響を語る人もいる。いずれにせ

よ、そこではお互いを「理念」的なアイデンティティの面から捉えることがなく、以下の語りに見られるような日頃のなじみの関係性を通して、活動の輪を広げていくのである。

N 相談員は私の家の隣の隣に住んでいたんだよね、で、私よりかなり先輩で、けっこうリーダーシップもある人だったからね、たぶんうまく操作されたんだと思うよ。嫌がってたけど、将来使い物になるかしらんていう考えもあったのかしらん。彼女の影響っていうのは、私には非常に大きく作用したと思う。…N 相談員も私の隣の隣で生まれてるんだわ。そこでずっと育って、外に働きに出たときもあったかもしれないけど、私もその隣の隣で生まれて育ってるから、ずっと見ていた。それで、私のところは今でも昆布取りをやってるけど、昆布取りって家族だけだと手がまわらないから、他人の手も借りなきゃならないんだわ。そういう時に N 相談員にも手を貸してもらったり、相談員の妹さんにも手を貸してもらったりして、そういうつき合いもしてたから。

したがって、その活動においても、なじみの関係に「楽しみ」が見出される。「みんなの顔見て木彫りしたあと、コーヒー飲んで休憩して、いろんな話したりして、それが楽しいから来る」人もいう。アイヌ語では「仲間」（「同胞」）を意味する「ウタリ」という語があるが、このような顔なじみになっているお互いのことを「仲間」と言っている。お互いのことを指し示す「仲間」という語を頻繁に耳にするということを指摘しておこう。

そして、その活動への参加において感じ取られる「アイヌ」としてのアイデンティティは、一見すると定型的な「アイヌ」／「和人」という区別に基づいているように見える。そのアイデンティティを否定（隠蔽）しようが、肯定しようが、「アイヌであること」には変わりがないようであり、誰が「アイヌ」であり、「和人」であるかということには明確な境界線が存在しているようにみ

える。実際に、以下で取り上げる「和人」の二人の人物も、自分が「アイヌ」ではなく「和人」であることを筆者にはっきりと表明しているし、さらに言えば、筆者が「和人」であることも揺るがせない「事実」であった。言い換えれば、生活世界においても、「アイヌ」／「和人」という定型的な区別は自己（他者）認識の道具として力強く機能しているように見えるのである。しかしながら、論点を先取りすれば、そこにはカテゴリーの創造と再編による境界の移動が存在していると言える。

それは、「生活」の文脈に深く依存しながら、複数のカテゴリーの中から適切なものを選び取っていくというものでもある。たとえば、様似での活動の中心にいる一人の人物は、「アイヌであること」に誇りをもてる環境づくりということを主張している。

やっぱり差別を体験したり、目の前で差別が繰り広げられたりしてるのにな、列車のポイント切り替えるようにね、今日からこっちに気持ちを切り替えるなんて難しい、時間がかかる。活動はしていながらも、本当に、抵抗感から抜け出せなかったり、これでいいんだろうかって思ってる仲間は大勢いると思うよ。やっぱり時間が必要だと思う。そのためにも、そういう自覚が生まれたり、誇り、自信が生まれたりするような環境作りをしなきゃ、「誇りを持って、自信を持って」って言ったって、そんなことできっこないんだからね。やっぱり、今回、国会も「アイヌを先住民族と認める決議」してくれたわけだよね、いい流れだと思うんだ。そういうふういきちとしたアイヌの歴史・文化を知ったうえだと、差別もなくなる、アイヌにも自信も誇りも生まれてくるかもしれないだよ。そういう環境作りだよね、大事なのはね。

しかし、そのような環境づくりを主張する一方で、常日頃から「アイヌ」として生きつづける必要はないという。それは、「アイデンティティの否定から肯定へ」という固定化されたアイデンテ

アイティの変容を意味しているのではなく、選択肢の一つとして「アイヌ」を選べるようにするということであり、そもそも常日頃から「アイヌ」として生きつづけることを主張するものではない。あくまで、「アイヌ」という選択肢が選択可能であれば良いという主張であり、人びとの背後に固定化された「アイヌ」という一つのアイデンティティを想定する（そのうえでアイデンティティを肯定的なものにする）ものではないと考えられるのである。

日常生活でアイヌだって意識をもって生きる必要はないからね。常に自分はアイヌだ、私はアイヌだなんて意識して生活する必要はない。…日常でいちいち意識してたら大変だし、疲れるだけだから、そんなことする必要ないし、それでいいと思う。だって、たとえば、関口さんだって、常に私が日本人で、日常でそんなことを考えながら生活なんてしてないでしょ。アイヌもそれでいいのさ。なにかあったときには、私はアイヌだって名乗り、声を出せるような人であればいいと思うよ。

なにかあったときに「アイヌ」として名乗るという選択肢が確保されていることが重要なのであって、常に「アイヌ」である必要はない。ある女性は、アイヌ文化を継承していた父親が同時に禅宗のお寺にも深く関わっていたことについて、「自分の親がなんでも、お寺のこともやる、和人のこともちゃんとやって、アイヌのこともやってというのは、自分の中では何の違和感もなく、見ていました」と語っている。

以上のように、「運動の理念」よりもお互いの「生活」が重視される傾向のなかで、そのような生活の都合に依拠して定型的アイデンティティを選択的に使用することが許容される。それは、一貫した意味のシステムから切り離されたアイデンティティをその都度選びとるということである。その意味で、「アイヌ」「仲間（ウタリ）」といった定型的語彙は、一貫した意味のシステムから切り離されながら、自己（他者）表象のため

に選び取られることを待っているストックであると言える。この時、アイデンティティは選択可能なストックに開かれており、固定化されてはいないのである。また、「生活」の文脈に深く根ざした定型的アイデンティティのありようを許容する彼（女）らの活動は、その当事者の輪をなじみの人間同士の結びつきによって拡大していく。なじみの関係とは、上述のN相談員との関係をめぐる語りが見出すように、日常生活の場を共有することによって、固定化されたアイデンティティや「社会的類型」では捉えきれない他者の理解しがたさが露わになった関係性である。逆に言えば、理解しがたい他者との関係があるからこそ、「生活」の都合に応じた定型的アイデンティティの可変的な使用が許容されていくのである。例えば、筆者が「仲間（ウタリ）」という語を気ままに用いることはできない。以下では、このような特徴をもつアイヌの人びとの活動において、「和人」と「アイヌ」の「連帯」可能性を示す事例について検討していくことにしよう。

佐々木みどり氏（60歳代・女性）は、アイヌ民族の男性と結婚後、夫の生まれ育った様似で暮らすようになり、30年ほどを過ごしている。彼女は、「シャモ（和人）」でありながら「アイヌ」の「仲間」になるという経験があったという。ただし、そのような経験の前提として、「アイヌ」／「シャモ」の境界を明確に意識させられている。それは、アイヌの人びとから「お前アイヌか」と言われて悔しい思いをするという経験であった。しかし、その際、彼女は「半アイヌだ」と言い返していたという。

「お前アイヌか」とか言われましたけど、それもちよっとシャモからしたら悔しいところもあってね。けども、私こういう性格だから、「半アイヌだ」とか言って、「半アイヌ」っていうのは（笑）、夫婦でいると、旦那さんといて、血は混じってないけど、そういうのが私の体の中にはなんぼか入ってんだとか言って…。

なぜ彼女は、このように言い返すことができた

のだろうか。どのようにして「半アイヌ」というカテゴリーを使えるようになったのだろうか。以下では、佐々木氏が「半アイヌ」や「仲間」などのカテゴリーを用いることによって「アイヌ」／「シャモ」の境界を再編するに至る彼女の実践に注目したい。彼女がアイヌの人びとの「仲間」になったことを実感した経験の一つは、家を建てた時の経験だという。この時、建前の餅を撒くための準備や、宴会の準備のために、何十人ものアイヌの人たちが手伝いに来てくれたのであり、仲間を想う気持ちの「すごさ」を実感した。

まず、家建てるにしても、昔は餅撒いたりしたでしょ、そんなのから、もう本当に、お金のないときでも、餅撒くには、みんなが「これだけあるから使ってくれ」とか、たいして出来ないけど手伝わせてくれとか、そういうのが、こっちから頭下げなくてもみんなが協力してくれたのが最高だったね、やっぱり。普通だったら、自分たちで餅を搗くとか、お金をかけてどこかに頼むとかね。でも、みんなが手伝ってくれたから、『機械うちにあるから』とか、それはそれはね。そのときが、いちばんすごいなって思った。何十人も来て、あつという間ですからね。だから、それこそ隣近所じゃなくて、隣近所の人でも手伝いには来てくれるけど、やっぱりアイヌの仲間がね。この家建てたときに、それはね、本当に実感した。…大工さんだからちょっとした一杯飲みがあるのね、そうしたらそのための料理も持ち寄りにしてくれて、浜の人は魚持ってきてくれたり、だから本当にすごいなって思った。ああいう仲間がいなかったら家も建てられなかったし。

この出来事のそもそものきっかけは、佐々木氏の夫とN相談員の夫とが「幼馴染」であったことである。

この家を建てるのには、ウタリ対策のあれで、昔相談員してたNさんという人にお世話になったのね。その人の旦那がうちの旦那と幼

馴染でしょ、様似出身だから。それでせっかく来たんだから、じゃあ家を建てたほうがいいってことで。…保証人もちゃんとお膳立てしてくれて。

佐々木氏は、夫の「幼馴染」との関係を通して、アイヌの人びとを「仲間」として実感していく。そして、その実感は、その後のアイヌの人びとの継続的な関係の中で一層育まれていくことになる。すなわち、この時手伝ってくれた人たちと共に、刺繍・舞踊・アイヌ語といった文化伝承活動を現在に至るまで長期にわたって継続していくことになるのである。活動の「常連」である5、6人のメンバーとともに、何年もかけて30枚ほどの着物を縫い上げたりした。

やっぱり大変だよ、自分でお弁当持って行ってっていうのは大変だけど、…やっぱりある程度やってるうちに、好きになったから通えて縫えたと思うのね。そのなかで、いろんなこと、アイヌの人のことばかりじゃないにしても、…やっぱり様似の人と仲良くもしたいし、顔も知りたいって部分もあったから、行くことにはなんにも抵抗なかった。行きたくなきゃ行かないばいいんだから。どうしてもやらなきゃなんない、どうしても協力しなきゃなんないっていうことじゃないから、…で、雑談しながら、いろんな交流があるでしょ。あそこ〔生活館〕に行けば、いろんな人の出入りがあるでしょ。

「仲間」になっていく過程では、「馬鹿になった」ともいう。その頃は、「少しでも様似の人間に、様似人になりたい」と思っていた。

運動会っていえば馬鹿するし、盆踊りっていえば馬鹿するし、そうやって行ってるうちに様似の人が認めてくれたっていうか。…で、今は、でっかい顔してるけどね。

このように佐々木氏は、刺繍・舞踊・アイヌ語といった文化伝承活動を「仲間」とともに続ける

と同時に、「運動会」や「盆踊り」といった出来事を通して「様似人」にもなろうとしていた。つまり、活動の「常連」になるといった継続的ななじみの関係——様似の活動では、上述のように、この関係が重視されていた——をもとにして「仲間」や「様似人」といったカテゴリーを獲得していったと言える。言い換えれば、「仲間（ウタリ）」「様似人」といったカテゴリーを生み出すことによって、「アイヌ」／「和人」の境界が移動し、より大きな包摂関係が成立していったのである。ここでは、この関係を「連帯」と呼びたい。そのことは、「アイヌ」／「和人」という定型的な区分がなくなることを意味するわけではなく、その区分をズラすような別のカテゴリーが生み出されていくということである。その結果として、今では「でっかい顔」をしていられるのであろう。

なじみの関係の継続が重要である一方で、それは誰にとっても可能なものではないことも事実である。それは、「生活」の文脈に深く根ざしている。様似の文化伝承活動は基本的に無償であるため、定職に就いている若い世代の人びとが持続的に活動することは困難である。そのため、継続的に活動を行なう5、6人の「常連」が形成されてくるのである。そして、「仲間」として伝承活動の継承者になっていくには、「一生やめない」人でなければならないという。「やっぱりアイヌの文様を縫うのには、一生やめないで縫える人でないと」。佐々木氏は、このような「生活」に深くかかわる関係の継続性の上に、「仲間」や「様似人」といったカテゴリーを形成・獲得していったのである。だが、支部会員のすべてがそれらの活動に熱心というわけではない。そこには、上述のような困難があるからである。また、文化伝承活動にかかわる人たちの中では、女性が圧倒的に多いのも、同様の理由によるものだという。

また、佐々木氏が継続してきたなじみの関係は、他者を「運動の理念」の中に位置づけられるアイデンティティや「社会的類型」（一元的カテゴリー）に基づいて理解することで築かれてきたものではない。文化伝承活動に熱心に関わってきたにもかかわらず、「アイヌとは何か」と考えることはないという。「自然と溶け込んでいるから全然

考えないし、深く考えたこともないし」。だが、アイヌの人たちに対する理解は、日常生活の経験の中で確実に積み重ねられていったといえる。それは特に夫との日常生活を介して積み重ねられ、「アイヌの人は毛深い」と「毛深いのは愛情深い」という理解が形成されていった。特に前者は、アイヌ民族に対する差別の中で語られてきた定型的語り口であるが、それが日常生活の文脈の中で別の意味を付加されて読み替えられていく。

結婚して間もないころね、「アイヌの人は毛深い」と「毛深いのは愛情深い」と、身内からそういうことをずっと言われてきてるのね。はあ、なるほどって思ってたの。たしかに、うちの旦那なんかそうですけど、普通の人も濃いわけでしょ。で、自分で一緒に生活してみれば、本当に愛情ありますよね。仲間なんかと活動していると、やっぱりすごい人の思いやりもあるし。いや、シャモにもあるんでしょうけど、でも一緒に活動しはじめて、「はあ、なるほど、本当にそうだな」ということが、本当に実感しましたよ。それはね、やっぱり、自分たちがいじめられていたせいで、やっぱり仲間意識が強いのか、その辺はわからないけど。愛情深いんだってことは、私、シャモから見た感想だけどね。やっぱり一緒に生活していると、そうだなって思いますよ。

それは、身近な他者と日常生活を長年ともにすることで得られた実感的理解であり、相手に直接的に聞くことで得られた知識ではない。日常生活の中の持続的な関係性の中で実感された他者の「生」そのものへの了解であったといえよう。

旦那に聞くこともできなかったのね、私。なんとなく失礼になる気がして。いくら夫婦だからって失礼にあたると思うから。…私も、あえて聞かないし。ただ、昔ここに住んでたんだぞとか、して、じいさんばあさんがこういう人だってことは、たまには言うけど、私もあえて聞かない。聞いたところで、私わか

るわけでもないし、だからしつこく聞かないのね。

以上のような関係性の積み重ねの結果、「差別」に対する実感的理解も生じる。ただしそれは、他者の「非対称」性を消すような直接的な理解（相手の心がわかる）といったものではなく、「シャモ」として「差別」される経験とアイヌ差別との「非対称」性を前提としながら生じるものであった。

〔自分が〕和人かなって思うのはやっぱり、「お前アイヌでないべ」って言われたときだね。やっぱり仲間でもね。…それはちょっと、シャモとして言われたときはショックでした。それはアイヌの仲間に入ってのことだけど、だから、アイヌの人がた「アイヌ、アイヌ」って言われたときにはきつと大変だったと思う。気持ちわかる気がする、自分がそう言われたとき。

子供が小学校でいじめられそうになったときに問題を回避できたのも、父親に対する実感的理解のおかげであったという。すなわち、子供は父親を尊敬していたため、アイヌであることを卑下しなかったのである。具体的な関係に基づく実感的理解が築かれていることは、差別への抗力になると言える。

「お前アイヌだ、アイヌだ」って言われたのさ。でも子供は、自分がアイヌってどういうものかわからないし、悪いものだと子供は思っていないし、子供はすごい父親を尊敬してた人だったから、だから絶対父親はすごい人だって思って育っていたから…、子供は先生に〔アイヌの歴史を〕教えてもらって納得したみたい。「お母さん、アイヌってすごいんですねえ」って、子供が小学生のときに言ったからさ。それではじめて、お父さんがこの様似生れで、お父さんの親、おじいちゃん、おばあちゃん、曾じいちゃん、曾ばあちゃん、お父さんの血を引いてるからお父さんもア

イヌなんだよってことを、子供には一応そこまでは教えましたけど。…アイヌの父親をもってるってことは自分では全然意識していないみたい。それが私、一番のあの子をほめてあげられるところかなって思ってるのさ。自分がアイヌだって意識していないみたい。でも自分の父親は平然と、聞かれば、「アイヌです」って言うてると思うのね。だから、そういうところがいいなって、私は思ってます。

次に、高瀬純治氏（60歳代・男性）の経験をみていこう。彼は、様似で生まれ育つが、就職のために道内他地域へ移る。その後様似に戻り、アイヌの女性と結婚して子供ができたのを機に、アイヌ民族の活動にかかわるようになった。彼もまた、北海道アイヌ協会の会員になることで各種の補助事業をうけることを参加の動機として語る。

俺は別にアイヌの血筋ってわけじゃないんだけど、その後、子どもが学校へ行くっていうときに補助があるわけでしょ。そういうあれで、ソフトボールだとか、いろいろな行事にはちょこちょこ行ってたけど、そんな熱心に行ってたわけでもないんだ。たまたま地区の理事をやった人が他の地区に引っ越していないから頼むって言われたのが、そもそもはじめなんだ。…まあどっちかかっていうと、子どもがいろんなことで世話になるわけでしょ、そっちの方がつよい。世話になるからっていう、そっちの気持ちの方が強かった。制度を利用させてもらうっていうかな。

そして、文化伝承活動への関与については、次のように語られる。

俺は、そんなに出ないよ。ただ、来ないかって誘われて、じゃあ行ってみるかかっていう程度で、まあ都合つけば行くっていうような感じだったよね。…踊りたって何回かしか行ってないから。…一緒に居て、まあ後ろの方で真似てるだけだけどね。男性も混じって踊るようなものは、少しは覚えたかなって

アイヌ民族の活動に関わることや、その中で民族衣装を着ることに「違和感はとくになかった」という。「いや、別に…、まあ、儀式に参加するんだから着るんだっていうぐらいしか、わかんないね」。前述のように、様似の活動では、お互いの困難な「生活」状況への配慮が逆に「気負い」というものを取り除き、「自然な楽しみ」を生み出すという状況があったが、佐々木氏のかかわり方には、「仲間」に誘われたら可能な範囲で活動に参加し、民族衣装も着るといった自然なスタンスが見てとれる。また、仕事帰りに、支部の事務所（生活館）にコーヒーを飲みに来るということも多い。

行けば、けっこう女の人たちも来てるしね。男の人はあんまり来てないけどね。女の人としゃべったり、…愚痴だとかを言い合ってるだけけどさ（笑）

現在、自然なスタンスで活動に参加している高瀬氏は、これまでも自らが「和人」であることや他者が「アイヌ」であることを意識することはなかったと語る。高校まで様似にいて、同級生の友達にもアイヌの人がいたし、よくお互いの家を行き来して遊んでいたという。「ただ友達だったから」。高瀬氏の父親は仕事柄アイヌの人たちとの交流が多く、アイヌの人が家に来て、お酒を飲んでいくこともよくあった。

俺は全然そういうのを意識することがなかったんだけど。ただやっぱり、俺が小さい頃、小学校なんかでは馬鹿にするっていうか、差別するような人は居たけどね、アイヌだとかって言って、でも、俺はそんな感じでもなかったし。うちにも、けっこう岡田（地名）の方の人とか遊びに来て、飲んだりなんかしてね、別にね。その人たちも、アイヌの人とか何とかがって考えたこともなかったし。…他の民族っていうのもね、ただアイヌ、アイヌとはみんな呼んでたけど、アイヌの人だっていうのはわかっても、それが民族だってい

うのは全然考えたこともなかったな。ただ、友達としてつきあう、昔から親父の代から行き来してるから、それについて歩いたから別に…、そういう感じだったよ、俺はね。

このような身近な人たち（「友達」）を目の前にして、「アイヌとは何か」と考えることはなかった。「俺も別に何の勉強もしてなかったしさあ、だから何ていうのかな、民族だからどうのこうのっていうのは…」。

前述の佐々木氏と同様に、他者をアイデンティティや「社会的類型」（一元的カテゴリー）に基づいて理解することのないなじみの関係性が築かれてきたと言える。ここにおいても重要なことは、日常生活の中の継続的な関係性であろう。高瀬氏にとっては「親父の代」からの継続的な関係性があったことが、自然なスタンスで「仲間」とともに支部活動にかかわっていくことを可能にした要因の一つと考えられる。

日常生活の中で、アイヌの人たちを意識することはなかった。ただし、「アイヌ」が「和人」と違って差別される存在であったことを知らなかったわけではない。それでも、高瀬氏が「アイヌ」／「和人」という民族の違いを意識しなかったのは、日常生活の中の継続的な関係性を築くことによって、すでに「友達」というカテゴリーによる実感的理解が成立していたからであろう。これは、佐々木氏の子供が父親に対する実感的理解をもとにして差別に対する抵抗力を形成していたのと同様の現象である。

佐々木氏と高瀬氏は、「アイヌ」／「シャモ」の境界を明確に意識し、自らを「シャモ」として位置づける一方で、「半アイヌ」「仲間」「様似人」「友達」といったカテゴリーを生み出すことで「アイヌ」／「シャモ」の境界を再編している。このことは、様似の活動では「運動の理念」よりもお互いの「生活」が重視される傾向があり、「理念」という一貫した意味のシステムから切り離されたアイデンティティをその都度の「生活の便宜」において選びとることが許容されていたことに由来すると言えよう。佐々木氏と高瀬氏は、「シャモ」「半アイヌ」「仲間」「様似人」「友達」といった定型的な表象のストックを駆使して、「アイ

ヌ」／「和人」の境界を移動させ、より大きな包摂関係を作り上げていたのである。この関係を「連帯」と呼びたい。そのことは、「アイヌ」／「和人」という定型的な区分がなくなることを意味するわけではなく、その区分をズラすような別のカテゴリーが生み出されていくということである。ここでは、お互いが「生活の便宜」に基づいて新しいカテゴリーを生み出したり、選び取ったりすることもある「普通の人間」(＝生活者)であるという実感がもたらす結びつきが生み出されている。

それは、文化伝承活動や日常生活において、継続的ななじみの関係性が築かれていたからこそ可能であった。このなじみの関係性は、お互いの「生活」が強く配慮される文化伝承活動や日常生活の中で築かれるものであり、「運動の理念」にもとづいて「アイヌとは何か」と考えることによって形成されるものではない。「運動の理念」よりも「生活」が重視される活動の中で、日常生活の文脈に根ざした具体的な関係性が築かれていったと言える。その関係性においては、高瀬氏のように、「仲間」に誘われたら可能な範囲で活動に参加し、民族衣装も着るといった自然なスタンスでのかかわりが可能になる。

また、この関係性がもたらすのは、「運動の理念」に基づく「弱者」「被差別者」という理解ではなく、かといって「差別」の痛み(受苦)の直接的な理解ないし共有でもない。そこにあるのは、「非対称」かつ「共約不可能」な他者に対する理解である。アイヌ差別についての佐々木氏の理解は、他者の「非対称」性を消すものではなく、「シャモ」として「差別」される経験とアイヌ差別との「非対称」性を前提としながら生じたものである。さらに、「アイヌの人は毛深い」と「毛深いのは愛情深い」という佐々木氏の理解は、一見すると(特に前者は)「アイヌ」に対する固定化された理解のように見えるが、実際には「毛深い」という定型的な語り口を自らの実感の中で組み替えたものである。佐々木氏は、夫との長期の具体的な関係性の中で、「毛深いのは愛情深い」という実感的理解を形成しているのである。ここでは、固定的カテゴリーからはみ出す他者の「共約

不可能」性が露わになっている。

そして、このような他者との具体的な関係にもとづく実感的理解は、差別への抗力をもっている。佐々木氏の子供や高瀬氏は、「アイヌ」が「和人」と違って差別される存在であることを知るが、それでも両者が「アイヌ」／「和人」という民族の違いを意識しなかったのは、日常生活の中の継続的な関係性において実感的理解(佐々木氏の子供の父親に対する理解、高瀬氏の「友達」に対する理解)が成立していたからであろう。

E. 結論

北海道日高地域の様似においてアイヌ民族の文化伝承・権利回復の運動に関わる人々の間の関係性の構築においては、①「運動の理念」よりも「生活」を重視する強い傾向、②日常的な馴染みの関係性という基礎、③それらを基盤とした定型アイデンティティの選択という特徴が見出された。生活世界においても、「アイヌ」／「和人」という明確な境界線にもとづく定型的な区別は自己(他者)認識の道具として力強く機能しているように見えるが、そこにはカテゴリーの創造と再編による境界の移動が存在していた。「運動の理念」よりもお互いの「生活」が重視される傾向のなかで、そのような生活の都合に依拠して定型アイデンティティを選択的に使用することが許容される。それは、一貫した意味のシステムから切り離されたアイデンティティをその都度選びとるということである。その意味で、「アイヌ」「仲間(ウタリ)」「様似人」「友達」といった定型語彙は、一貫した意味のシステムから切り離されながら、自己(他者)表象のために選び取られることを待っているストックであると言える。この時、アイデンティティは選択可能なストックに開かれており、固定化されてはいないのである。また、彼(女)らの活動は、その当事者の輪をなじみの人間同士の結びつきによって拡大していく。なじみの関係とは、日常生活の場を共有することによって、固定化されたアイデンティティや「社会的類型」では捉えきれない他者の「共約不可能」性が露わになった関係性である。逆に言え

ば、「共約不可能」な他者との関係があるからこそ、「生活」の都合に応じた定型的アイデンティティの可変的な使用が許容されていくのである。

より具体的にいえば、佐々木氏と高瀬氏は、「アイヌ」／「シャモ」の境界を明確に意識し、自らを「シャモ」として位置づける一方で、「半アイヌ」「仲間」「様似人」「友達」といったカテゴリーを生み出すことで「アイヌ」／「シャモ」の境界を再編している。このことは、P地区の活動では「運動の理念」よりもお互いの「生活」が重視される傾向があり、「理念」という一貫した意味のシステムから切り離されたアイデンティティをその都度の「生活の便宜」において選ぶとすることが許容されていたことに由来すると言えよう。佐々木氏と高瀬氏は、「シャモ」「半アイヌ」「仲間」「様似人」「友達」といった定型的な表象のストックを駆使して、「アイヌ」／「シャモ」の境界を移動させ、より大きな包摂関係を作り上げていたのである。そのことは、「アイヌ」／「シャモ」という定型的な区分がなくなることを意味するわけではなく、その区分をズラすような別のカテゴリーが生み出されていくということである。ここでは、お互いが「生活の便宜」に基づいて新しいカテゴリーを生み出したり、選び取ったりすることもある「普通の人間」(＝生活者)であるという実感がもたらす結びつきが生み出されている。

このように形成された人間同士の結びつきは、自己／他者を一元的カテゴリーにおいて表象することとは無縁であり、それゆえにこのような関係構築のプロセスを理解することは、ソルニットの言う災害時のエリートパニックを避けることにつながるのである。

G. 研究発表

・口頭発表

The People who Make the Solidarity and "Co-living" with the Ainus (「アイヌ民族と共生／連帯する人びと」), International Workshop: Anthropology of Cultural Interface, The School of Modern Languages and Cultures, University

of Hong Kong, 22. Feb. 2011.

参照文献

柿木伸之

- 2010 「他者との来たるべき共生へ向けた哲学的試論：歓待と応答からの共生」 広島市立大学国際学部国際社会研究会 (編)『多文化・共生・グローバル化：普遍化と多様化のはざま』ミネルヴァ書房、pp.117-152。

関口由彦

- 2007 『首都圏に生きるアイヌ民族：「対話」の地平から』草風館。

- 2010 「首都圏のアイヌ民族の文化・社会運動における日常的エスニシティ」小田亮 (編)『グローバル研究叢書1 グローカリゼーションと共同性』成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、pp.67-97。

ソルニット、レベッカ

- 2010 『災害ユートピア：なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』(高月園子訳)、亜紀書房。

松田素二

- 1985 「アフリカ都市における伝統の非連続性について：ある自発的結社の軌跡から」『人文研究』(大阪市立大学文学部) 37 (2) : 17-49。

- 1986 「生活環境主義における知識と認識」『人文研究』(大阪市立大学文学部) 38 (11) : 41-63。

- 1989a 「必然から便宜へ：生活環境主義の認識論」鳥越皓之 (編)『環境問題の社会学理論』御茶の水書房。

- 1989b 「語りの意味から操りの力へ：西ケニアのフィールドワークから」田辺繁治 (編)『人類学的認識の冒険：イデオロギーとプラクティス』同文館、pp.357-386。

- 1990 「伝統の生成、氾濫、そして反逆：アフ

リカの伝統から何を学ぶか』『人文研究』(大阪市立大学文学部) 42(6):31-52。

2009 『日常人類学宣言! : 生活世界の深層へ／から』世界思想社。

i この関係性は、自らが被災したわけではないボランティアとの間にも形成され得るものである。ソルニットは、あるボランティアが、自分はニューオリンズを救うためや、社会的公正のために働いているのではないと語っているのを聞いている。「最初は理想主義的な理由でボランティアをやっていると信じていたけど、注ぎ込むより、得るもののほうが大きかった。うんと大きい。ここに住んでいた人たちから手紙やら葉書やらをもらんだけど、誰もがただもうここに帰りたくてうずうずしている。ぼくはこの人たちのため、いっしょに働いている仲間たち、それからボランティアたちのためにこれをしている。彼らから、愛をもらっているからだよ」[ソルニット 2010: 403-404]。このボランティアは、被災者を「求める者」として見なすことなく、むしろ自らが大きなものを「与えられている」と感じているのである。それは、「与える者」／「求める者」といった関係性を越えた結びつきとなっていよう。

ii 柿木は、「他者」を「非対称」かつ「共約不可能」な存在として捉える。柿木によれば、他者の苦しみにどれほど心が痛んだとしてもその苦しみのものを自ら味わうことはできず、「非常に親しい人であっても、自分と異なる以上、自分を投影して理解することは不可能」[柿木 2010a: 118]であり、自己と決して重なり合わないという意味で、自己と他者とは「非対称」である。また、他者は、「他者を一面において捉えることを可能にする、その他者についての手持ちの観念——役割や社会的類型のようなもの——を不断にはみ出していく」[柿木 2010a: 119] からこそ、安易なカテゴリーによる理解を拒むという意味で、「共約不可能」な存在である。柿木の議論において、共生すべき対象はこのような他者として捉えられるのである。